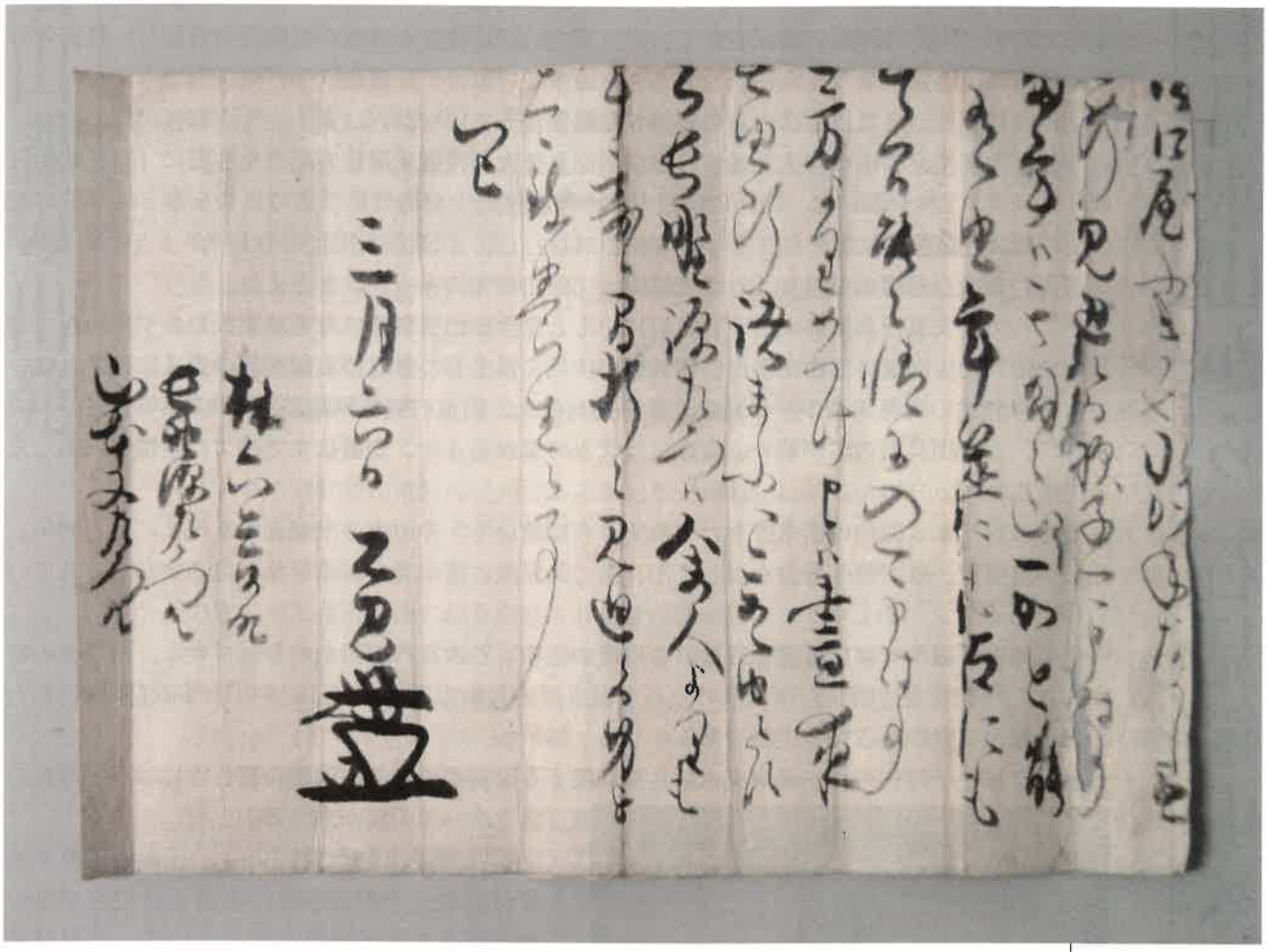
石見銀山遺跡ニュース

Newsletter of the Iwami-Ginzan Silver Mine Site　MAY 2002　NO.3

平成14年5月10日発行　第3号

島根県・大田市・仁摩町・温泉津町教育委員会



【大久保長安書状（長野家文書）年未詳 3月6日】

銀の精錬の方法に「アマルガム法」という水銀を利用した方法がある。この方法は南米の鉱山で行われていたが、日本でも佐渡で大久保長安の指揮により一時期行われていた。石見では唯一この史料で「水かねなかし」つまりアマルガム法についての記述を見ることができる。（写真提供・石見銀山資料館）

>> Contents

page 2　発信・石見銀山から、石見銀山へ　出番を待つ村方の資史料　田中圭一
3　石見銀山課の出発　連携と協働をめざして　大國晴雄
4　「石見銀山遺跡」国史跡指定拡大なる！
6　鏝絵の魅力①　大森町西性寺　渡部孝幸
7　石見銀山遺跡が分かりやすく！～立体模型や説明板の設置～
8　銀山で狂言の鑑賞会～石見銀山体験シンポジウム
9　町並みを歩く（3）～修理の現場から～
10　温泉津町から・恵比須神社社殿、県指定文化財になる！
11　平成13年度調査活動日誌抄（下半期）
12　資料紹介④上野家（下博多屋）近代史料について
13　資料紹介⑤旧大森村覚法寺の梵鐘
14　平成14年度石見銀山関連事業の概要（島根県関係）

発信・石見銀山から、石見銀山へ

出番を待つ村方の資史料

石見銀山遺跡発掘調査委員会委員　田　中　圭　一

1603（慶長8）年、大久保長安は石見銀山の山功者、安原田兵衛（でんべえ）、吉岡隼人（はやと）、宗岡弥右衛門を伴なって伏見に家康をたずねる。家康は3人に胴服、扇子をおくってこれまでの労をねぎらった。いま胴服は東京と京都の国立博物館に展示されている（重文）。このことは江戸時代という新しい経済の時代の成立に、石見が果たした役割の大きさを語っている。

明治時代をむかえて銀山は人々の記憶から遠ざかっていった。

1932年大田中学の山根俊久教諭が「銀山旧記」や大森代官所関係の記録をもとに『石見銀山に関する研究』2巻を著わし、戦後には京大の小葉田淳博士が島根県採集の史料をもとに『日本鉱山史の研究』を著わした。その後昭和50年代には村上直、江面龍夫氏と田中圭一が「吉岡家文書」を『江戸幕府石見銀山史料』として世に問うて銀山研究にきっかけを与えた。

ところで、安原田兵衛の末裔が石見町にいると聞き銀山資料館の仲野義文氏をわずらわして安原家を訪れた。同家には由緒書や、田兵衛が伏見に参上したときの衣類が昔のままに残されていた。さらに彼の出身地備中・早島の塩津を訪れると、同地の宮崎御崎神社の文禄2年（1593）の棟札に、安原田兵衛の名が載り、塩津には代々の墓があった。安原はすでにこの頃備中にあって有力鉱山師だったのだ。

安原の寺である銀山の清水寺をたずねてさらに驚いた。その寺の土蔵にある棟札には1599年、田兵衛ら安原一族が建築資金を出して田兵衛の隣屋敷に清水寺を再建新築したことが記されていたのである。

温泉津の多田英一家には文禄以後のこの町の老中（乙衆（おとな））の記録がのこっている。摂津西の宮からきた廻船業者中嶋平左衛門家の史料や温泉屋（ゆや）庄兵衛の史料などは、いずれも400年間にわたる温泉銀山（ゆのぎんざん）にかかわる基本史料である。

湯里には尼子時代の領主温泉英永（ゆひでなが）新兵衛に関する資料がのこり、仁摩の満行寺には小笠原氏の動きを示す資料がのこる。

▲辻ヶ花染丁字文胴服（重要文化財）
清水寺所蔵（京都国立博物館寄託）

石見は産出した銀によって日本と世界を結び付けた。そのいきさつを語る資史料が町や村や個人の家で出番を待っている。石見は産銀業の先進地だから生野や佐渡や伊豆に技術者や商人が出かけた。それゆえ、他国にも多くの史料がのこっている。銀山へはまた、毛利領の長門の肥中や備中の吉岡・小泉銅山から商人や技術者がやってきた。

いま、石見銀山研究にとって大切なことは地域の資料に光をあて、それらの資史料に石見の輝かしい歴史を語らせることである。それが文化遺産をまもる運動の第一歩ではあるまいか。

石見銀山課の出発（スタート）

連携と協働をめざして

大田市石見銀山課長　大 國 晴 雄

平成12年11月の世界遺産の暫定リスト入りを期に、大田市では平成13年4月、専任の石見銀山課を設置し、世界遺産登録の推進体制を整えると共に関連する諸事業の調整と推進並びに地元対応の窓口としたところです。

教育委員会の文化財保護行政も併せて担当し、課員5名と小人数ですが、同室に大田市・温泉津・仁摩町からの派遣職員で構成される広域行政組合の企画担当（地域振興係）も置かれ、石見銀山遺跡を共有する1市2町がいっそう連携することが可能となりました。

現在、県の担当職員や市教育委員会文化振興室職員を含めると20名を超える職員が石見銀山に関っており「連携と協働」が大きな課題となっているところです。

新設の石見銀山課ではまず、石見銀山遺跡の「価値」や「世界遺産」についての説明・啓発が必要と考え、13年度の1年間で市内外を対象にした講演・説明会を約20回、外部からの視察を10件ほど受け入れてきたところです。

次に世界遺産登録後の姿を考え、世界遺産「白川村」や石見銀山遺跡に類似する大規模遺跡である一乗谷遺跡を調査し、また現在の石見銀山遺跡を訪れる見学者・観光客の実態調査、そしてそれに基づく計画づくりも進めています。

ところで石見銀山遺跡の地元である大田市大森町には約210世帯、約500人の方々がお住まいです。高齢者比率も36％ですがお年寄りも元気で、また少ないけれども活発な30～50代の方々、事業所に勤めている20代の姿も見られます。こうしたお住まいの方からの要望や課題を解決するための窓口や市役所内部の総合調整も石見銀山課が担当しています。

さらに重文・旧熊谷家の保存活用や重伝建地区保存整備（町並み保存事業）などの石見銀山に関わる文化財保護行政も担当しています。

平成14年3月、指定申請から2年数ヶ月かかった史跡拡大（追加指定）告示も1000を超す地権者などの協力と関係者の努力によりなされたところです。

課題山積ですが国内唯一の「石見銀山課」です。地元、市役所庁内、温泉津町・仁摩町、島根県、文化庁との連携・協働作業を進め、将来、世界遺産に登録されてよかったと言ってもらえるよう様々の場面で努力してまいります。

▲重伝建大森銀山地区の町並み（1987年国選定）

「石見銀山遺跡」国史跡指定拡大なる！

「石見銀山遺跡」の国史跡指定については、平成14年3月19日、官報告示により、範囲拡大の指定がなされました。

昭和44年（1969）に山吹城跡や大久保間歩をはじめとする14箇所、約27ヘクタールの地域が受けていましたが、これにより、石見銀山の主要部である「銀山柵内（さくのうち）」、戦国時代に銀山の拠点になった「石見城跡」、「矢滝城跡」や「矢筈城跡」、銀の積出港であった「鞆ヶ浦」、「沖泊」などの地域が指定され、鉱業権者の未同意部分を除く約320ヘクタールが指定地域となりました。

世界遺産登録の要件としては、国による保護が図られなければなりませんが、この指定により、「石見銀山遺跡」のほぼ全域において、文化財保護法による法の網が掛けられ、保全が図られることになります。また、国の助成も可能となり、今後「石見銀山遺跡」として一体的な整備を行うことができるようなりました。

【1．告示内容】

（1）名　称
石見銀山遺跡

（2）関係告示
昭和44年文部省告示第198号

（3）所在地
島根県大田市大森町、邇摩郡温泉津町、邇摩郡仁摩町

（4）地　域
（図面告示）

【2．指定内容等】

（1）地域及び面積
銀山柵内、矢筈城跡、矢滝城跡、石見城跡、鞆ヶ浦、沖泊
指定対象地面積：2,937,810m²
（別に既指定地267,318m²）
合計面積：3,205,128m²

【3．経　緯】

（1）平成11年9月20日、大田市、温泉津町、仁摩町から文部大臣（現文部科学大臣）あて申請。

（2）国の審査を経た後、平成11年11月19日、国文化財保護審議会（現文化審議会）において決定の答申がありました。

遺跡の概要

銀山柵内（ぎんざんさくのうち）

大田市大森町と仁摩町に位置しており、1526年に本格的な開発が始まった石見銀山本体が所在しています。江戸時代の絵図によると鉱山の支配体制を確立するための柵をめぐらしていた石見銀山遺跡の中心となる範囲です。「銀山柵内」には、銀鉱石の採掘や製錬の施設などに関する間歩や吹屋跡の生産遺跡や銀の直接的生産者とそれに関わって暮らす人々の集落跡などの生活遺跡、銀山に関わる寺院・寺社をはじめ墓石・供養塔などの石造物を含む信仰遺跡、銀山の争奪に係る城跡や銀の生産、人々の生活や物資流通を管理するための休役所跡などの支配関連遺跡が数多く存在します。

石見城跡（いわみじょうあと）

仁摩町仁万から大田市大森町に至る街道沿いに位置し、標高153mの天然の要害である岩山に築かれています。山頂部に郭が存在し、土塁や堀切が認められます。仁万平野の南端に位置し、海岸部との境界を押さえる目的を果たしていた城と考えられます。

沖泊（おきどまり）

銀山柵内の仙ノ山から約10kmの温泉津町の日本海に面して位置しています。西に開口し、岸まで深い良港であり、港の北に温泉氏が築いたといわれる櫛山城跡が、南に毛利氏が築いた鵜の丸城跡があり、経済的・軍事的な拠点であったことが分かります。また、絵図からは船表番所が置かれ管理されていたことがわかります。周辺地域には16世紀後半のものと思われる石造物が多数存在し、銀山柵内との関連が伺われます。

矢滝城跡（やたきじょうあと）

大田市と温泉津町の堺に位置しており、山吹城の南西2kmにある標高約630mの山に築かれた山城です。石見銀山争奪の拠点となった山城であり、城跡郭、土塁、石垣、堀切、立堀が良好に残ります。また、文献上も毛利元就の出陣により矢筈城から尼子氏の軍勢が撤退したことが読みとれます。

矢筈城跡（やはずじょうあと）

温泉津町と仁摩町の町堺に位置しており、山吹城の西方にある標高約480mの山に築かれた山城です。南北二つの峰に郭が設けられており、それぞれに堀切が認められます。また、文献上も大内義隆が1528年に築城したとの記述があり、銀山攻防にかかわった山城と考えられます。

鞆ヶ浦（ともがうら）

銀山柵内の仙ノ山から直線距離で6.5kmの仁摩町の琴ヶ浜の西端に位置し、銀山開発の初期に鉱石を買い付ける船がついた港と伝えられています。船の係留用の綱を結んだと伝えられる自然尾岩盤をくり抜いた「鼻ぐり岩」があり、港内に独立する小島「鵜の島」には銀山の開発者である神屋寿禎が1535年に勧進したと伝えられる「厳島神社」が現存するなど、銀積み出しの港の伝承や関連する遺跡も見られます。

石見銀山の４代特色とは

「石見銀山」は現在の島根県大田市大森町一帯にあった鉱山です。石見銀山は、国内はもとより世界にも大きな影響を与えた日本を代表する鉱山であり、16世紀初めの本格的な開発からおよそ400年にわたる歴史を持ちます。

》時代の先端をゆく鉱山技術

中近世において日本は世界有数の鉱物資源をもつ国であり、その鉱山技術は優れたものであったといわれています。その中でも石見銀山は国内の鉱山技術の先駆けであり、中心でもありました。特に朝鮮半島からもたらされた「灰吹法」は、石見銀山の産銀量を飛躍的に増大させただけではなく、日本国内各地の鉱山に伝わり、日本を一躍世界の産銀国としました。

》時代を転換させる大きな力

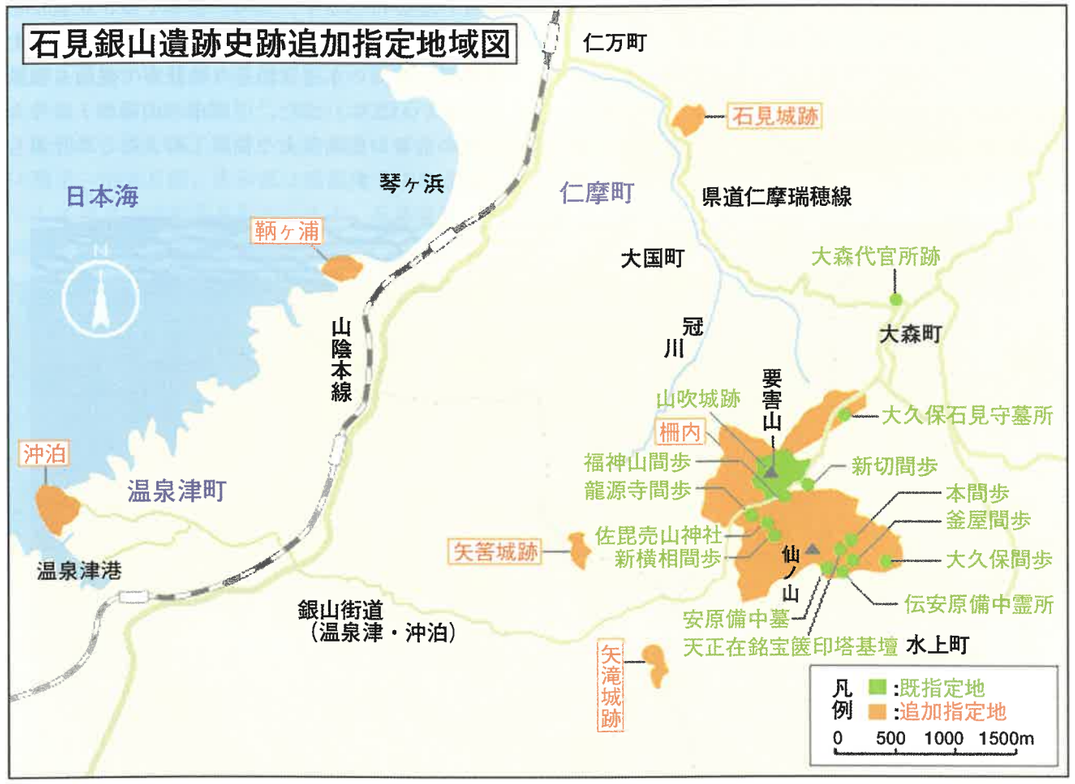
戦国時代、高品質で大量の銀を産出する石見銀山は争奪の的となり、支配者の交替が繰り返されました。石見銀山から産出された銀は広く国内に流通し、群雄割拠の日本を統一させる大きな力となり、その後も、銀は徳川幕府の貨幣政策の基本となり、江戸時代の日本の繁栄の基礎となりました。

》世界に渡った石見銀

16世紀中頃から17世紀前半にかけてオランダやスペインが行った銀を介したアジア貿易では、石見銀が最大の量を占めていたといわれており、また、朝鮮半島や中国にも輸出され、この時代の政治や経済に大きな影響を与えました。

》400年の歴史が今も残る

石見銀山は近世の大規模な鉱山開発が行われておらず、中近世の当時の姿をとどめています。また、鉱山の生産の遺跡だけではなく、銀や物資を運んだ街道や港湾、鉱山を管理した城や代官所、鉱山で暮らす人々が信仰した寺院などが今も残っており、人々の生活の中で活かされています。



鏝絵の魅力①―大森町西性寺

渡部孝幸

やはり、「鏝絵」をどう読むかということが話題になるし、「コ・テ・エ」と読むんですと言っても、必ずといっていいほど聞き返されます。これは、私たち「まちなみ探偵団」が本格的に調査を始めたときから今日まで続いていて、これからもこうした問答は繰り返され続けられるでしょう。

この魅惑に満ちたネーミングは、左官さんが日ごろ壁塗りで用いる鏝を使って土蔵や民家の壁に家運隆昌や招福の願いをこめ、様々な絵柄を漆喰で浮き彫りに描くことから付けられたものです。

鏝絵という名称が使われだしたのは、江戸末から明治にかけて活躍した伊豆長八こと入江長八（1815～1889）の功績によるところが大きいといわれています。彼の生地である伊豆半島の松崎町浄感寺に昭和29年に建立された顕彰碑の碑文に彼の生涯にわたる業績が認められ、鏝絵という文字が使用されていることから広まったのではないかと考えられます。

鏝絵は、ほぼ全国的に存在しており、入江長八がその大きな影響を与えた左官職人として元祖的な役目を果たしているといわれています。

この石見（石州）に残るたくさんの鏝絵は明治から大正、昭和の初期にかけて作られたものが大半ですが、長八の影響があったかどうか定かではありません。しかし、明治期、すでに石見から東京へ出稼ぎに出ている左官職人がいることからもなんらかの交流が考えられます。特に、長八が明治10年の内国勧業博覧会に出品した「富嶽」は参加者をうならせ国から褒賞を得たといいますから、石州の左官職人に影響を与えたといっても過言ではないと思われます。

▲経蔵全景

大森町の町並みにある西性寺経蔵に残る作品で、「鳳凰」をはじめ「牡丹」や「菊」の大輪を見事に描ききった石州左官・松浦栄吉(1857～1927）も東京に行き活躍した一人です。

彼は幕末の安政5年（1857）、仁摩町馬路に生まれています。「馬路教育史」によると、東京で左官として活躍していたとき、外務省の嘱託として上海へ領事館建設のため派遣され、そこでイギリスの左官技術の蛇腹（ジャバラ＝壁と天井の境の飾り）を修得します。当時、日本では、蛇腹が出来る左官がいなかったため、日本に呼び戻され大阪郵政管理局の木造洋館造りの仕事で蛇腹を披露したといいます。また、下関市の山陽ホテルや九州大の前身の福岡医大や福岡工科大などの仕事もこなしています。

◀ダイナミックに羽ばたく鳳凰

彼は伝統的な左官技術に加え、蛇腹といった新しい技術を修得していることはもちろん、人間的な魅力もあって「左官の神様」と呼ばれています。彼が仕事で福岡県の直方駅に降り立ったとき、印半纏の男たちがずらりと並んで左官の神様を出迎えたといいます。馬路の実家には朝鮮半島で手がけた建物の写真や東京四谷での葬儀の写真が残されています。葬儀のアルバムを見ると人力車の台数にも驚くが自動車が列をなしている光景にはもっと驚かされます。

門徒であった栄吉が、還暦を迎える大正8年頃に作ったのが西性寺経蔵の「鳳凰」であり「牡丹」や「菊」です。すでに80年以上経っていますが、迫力は全く衰えていません。正面の壁には蒼空に羽ばたく「鳳凰」のダイナミックな姿が彫刻され、羽の端にはガラス玉が埋め込まれ制作当時はキラキラとまばゆいばかりであったといいます。他の3面には、大輪の「牡丹」や「菊」が彫刻されており、経蔵全体が彼のトータルな作品のようです。図柄の構成や浮き彫りの技法など、余技とはいえ彼の左官人生を集大成した輝きを感じます。

栄吉の長男の栄太郎(1885～1945）も父栄吉同様、彫刻ものを得意とし、腕が良かったようです。「一人前になるまでは親子の縁を切る」とまでいわれて厳しい修行を経験し、後に「松浦式人造」と呼ばれる左官仕上げの技法を考案して左官業界の発展に尽くしています。

鏝絵をとおして、栄吉をはじめとする多くの石州の左官職人たち一人ひとりが貧困を前向きなエネルギーにかえ、近代の礎を築くため鏝一丁に命を懸けて生き抜いていった熱き想いが伝わって来ます。

（大田市建築住宅課長）

石見銀山遺跡がわかりやすく！

立体模型と説明板の設置工事が終了

銀山公園に設置された総合案内用の立体模型は、3.6×5.0mの大きさで、地形のスケールは1／1,000です（ただし、水平方向と垂直方向は1：1.2の割合です）。柵内をはじめ石見銀山遺跡の主要部のすべてがカバーされています。アルミ鋳造、耐候性塗装仕上げ、架台は大屋石です。

説明板は横1.5m、高さ2.1mの大きさで、本体はステンレス構造・福光石張、表示部は磁器板（フルカラー）・ステンレス切文字で表示されています。石見城跡、矢滝城跡、沖泊、鞆ケ浦の4カ所に設置されました。

▲銀山公園に設置された立体模型。左奥の山は要害山。

◀立体模型の部分拡大。坂根口側から銀山山内をみる。右が仙ノ山、左が要害山、左上が大森地区である。

▲鞆ケ浦の説明板。

石見銀山体験シンポジウム
「狂言から学ぶ庶民の暮らし」

大田市外2町広域行政組合企画担当では、平成13年12月9日（日）、「狂言から学ぶ庶民の暮らし」と題して、石見銀山体験シンポジウムを大田市立大森小学校で開催しました。

このシンポジウムは、大田市・温泉津町・仁摩町にまたがる「石見銀山遺跡」の歴史的価値を広く圏域の皆さんにお知らせするために、年間を通した講演会事業の一環として、島根県と1市2町、大田市外2町広域行政組合の共同開催で計画しました。

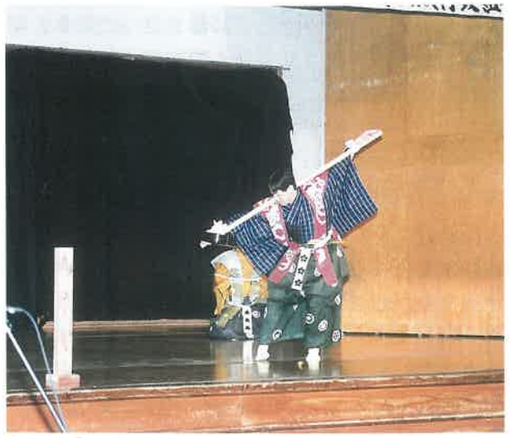
企画には、民間で組織する「石見銀山世界遺産をめざす会」（代表／河村政経）のみなさんにテーマ設定や企画内容についてご協力いただきました。

今回は、石見銀山が最も栄えた中世を中心に、庶民の文化や時代背景をテーマにした講演と、中世の庶民が生み出した芸能である「狂言」の公演を行いました。

▲藤岡大拙氏による講演

当日は、肌寒い天候の中で約100名の皆さんにご参加頂きました。会場の大森小学校体育館では、館内に竹やぶをイメージする青竹を立て、舞台横には竹垣や池を配した日本庭園を施し、中世の雰囲気と舞台の演出を高めました。

シンポジウムは、中世の時代背景について「中世の文化と庶民の暮らし」と題して、島根県立島根女子短期大学学長／藤岡大拙さんにご講演を頂きました。講演は、中世の人々の生活模様や娯楽を中心とした文化について、初めての方でも分かりやすいように、現在も残る中世の名残りなどを例にあげながら、1時間30分にわたって行われました。


▲狂言「棒縛（ぼうしばり）」の様子

つづいて、講演会終了後に「狂言」の公演を行いました。

狂言を公演していただいたのは、主に関西を中心に活躍しておられる大蔵流狂言「善竹会」（代表／善竹忠一郎さん）の皆さんで、「棒縛（ぼうしばり）」、「仏師（ぶっし）」の2曲を披露していただきました。

普段、見る機会が少ない狂言ですが、生で感じる迫力と狂言独特の笑いに、参加者は時間が経つのを忘れ、一時を中世の文化に浸りました。

参加者の皆さんからは、「とても分かりやすい講演だった」、「狂言がこんなにおもしろいものとは思わなかった」等、手ごたえのある感想を頂きました。（大門）

▲狂言にみいるシンポジウムの参加者

町並みを歩く 3
～修理の現場から～

建物を保存修理する場合、事前に建物の現況や破損状況を調査します。また、傷みが激しいためやむを得ず解体する場合は、できるだけ記録保存することにしています。

一方、事前の調査や修理中の段階で、建物の痕跡調査（創建や増改築の年代特定など）を行うとともに、継ぎ手や左官仕事の中に当時の職人の技術を知ることができます。

▶建物の現況・破損状況調査
安養寺本堂天井裏にて
梁組みの調査（2000/12）

このような場面に出会えたとき、今に生きる職人さんとともに、木造建築の伝統的工法のだいご味を共感できます。

〈修理前　左：旧安田家　右：旧勝部家〉

▲
川上家住宅
ハ149、ハ152番地
KoW3、KoW4

明治初期の建築（推定）　向かって左手は旧安田家、右手は旧勝部家（元は安田家）。似通った2棟が並び建ち、いずれも切り妻屋根で平入り本2階建ての標準的な町屋形式である。旧安田家は、通り土間を左側に持つ奥行き二間取りの比較的小規模の町屋様式をとり、旧勝部家も同様に、通り土間に座敷二間という町屋の間取りであった。しかし、旧勝部家は半解体の際、土間・縁側・和室一間という仕切りが後の改造のものであることが認められ、本来はこれらが一つ部屋として機能していたと推定できる。おそらく、通り土間と座敷の機能区分がない、作業場か店のような1階部分を広く使う用途であったと考えられ、建築当初は、旧安田家は専用住居、旧勝部家は店もしくは作業場というように機能分担していたと思われる。

安田家は、真言宗長楽寺（銀山町昆布山にあったが明治元年10月震災により滅失(*1)）の出納に関する帳簿を保管していた(*2)ことがわかっている。

今回、土蔵はその傷みがひどく修理不能のため解体に至ったが、建物内部にこの長楽寺ゆかりと推定される掛軸を納めた箱の蓋が見つかった。箱は84.8×27.1（内法83.0×25.3）×0.9cmの檜材で、外側は黒漆塗り仕上げ。その内面に縦3段書の墨書があり、上・中の2段は軸物の名称と幅数、下段には総数、年月日および記載者の花押が記されていた。

〈修 理 後〉

書き換えや抹消の痕跡があり、天文22年癸丑(1553)、永禄5年壬戌（1562）と記載年月日の異なる花押が認められる。（西村）

*1　『石見銀山百ヶ寺』　三瓶古文書を読もう会　1995年
*2　土蔵の押入れにあった古文書104点は、平成11年に現所有者の川上氏より長楽寺文書として銀山資料館へ寄託されている。また、今回の修理中、主屋の襖や壁の下張りに主として江戸末期の長楽寺関連の古文書が使用されていたことがわかった。

恵比須神社（温泉津町沖泊地区）が県指定文化財に！

島根県文化財保護審議会（会長　町田　章奈良文化財研究所々長）から、昨年10月30日、温泉津町沖泊地区の「恵比須神社本殿1棟・拝殿1棟」が県指定文化財の答申を受けました。恵比須神社は大永6年（1526）に、筑前（現在の福岡県）那賀郡芦屋浦の住人の神託によって建立されたと伝えられています。大永6年とは、神谷寿禎が石見銀山を発見した年にあたり、恵比須神社と石見銀山との関連が推定されます。本殿の主要部材はクスノキです。クスノキを柱などの主要部分に用いた中世の社寺建築は、和歌山県、瀬戸内海沿岸地域や九州各地に見られますが、日本海沿岸では大変珍しい建築物となります。

恵比須神社は、沖泊港の埠頭から東へ100m程の北斜面に狭い段を造成して、本殿と拝殿が建っています。本殿は一間社流造で南面し、屋根は桟瓦葺です。本殿前に桁行2間、梁間2間、切妻造、桟瓦葺の拝殿が建ち、簡素な合いの間で繋いでいます。

本殿の柱、内法長押（うちのりなげし）、頭貫（かしらぬき）、組物（くみもの）、庇の桁（ひさしけた）、海老虹梁（えびこうりょう）など身舎実肘木（もやさねひじき）より下の主要部材と、これより上の桁、虹梁、妻飾りでは、材種が異なるだけでなく、木鼻（きばな）等の絵様（えよう）の形に時代差があり、風化の程度も違うことから、実肘木より下は当初材、桁、梁より上は後世の取替え材と判断できます。

当初材はクスノキで、身舎頭貫の挙鼻（こぶしばな）や庇頭貫の象の木鼻、海老虹梁の形から16世紀前期から中期頃と推測されます。また、庇柱の寸法や面取り数からも本殿は近世以前に遡るといえます。桁、梁より上の材はマツで、虹梁木瓜形の渦の形から17世紀前期頃のものと推測できます。

拝殿は、西側は斜面下まで柱が延び、懸造（かけづく）り様になっています。外部の一部に赤く彩色された痕跡が残りますが、現在はほとんど失われています。虹梁や木鼻、笈形（おいがた）の形や渦などの彫刻模様から、建築年代は江戸時代末期の19世紀中頃と判断されます。

▲波の上に踊る2匹の鯛の薄彫りを施した古材。クスノキ材。

恵比須神社本殿は、島根県内で知られている建築のうち、中世に遡ることのできる数少ない遺構の1つであり、この地域では極めて貴重なものと言えます。また、その伝承や使用材料から、九州や瀬戸内海沿岸とこの地域との中世からの結びつきを推測させるものであり、沖泊や温泉津の歴史を考える上で重要です。（友村）

※参考文献
斎藤英俊『1999温泉津―伝統的建造物群保存対策調査報告書』（温泉津町教育委員会、1999.3）

▲本殿身舎頭貫の挙鼻で、クスノキ材。形から16世紀前期～中期頃とみられています。

◀恵比須神社本殿（左）、拝殿（右）

石見銀山遺跡調査活動日誌抄

下半期・平成13年10月～平成14年3月

10月、よずくはでのある風景。温泉津町西田にて。

10/11~11/16	本谷遊歩道トレンチ調査
10/8	編年史料綱目編集会議（欧文史料）（京都）
10/12	石見銀山遺跡調査スタッフ連絡会（第4回）
10/21	銀の道ウオーク（銀山公園～西田）
10/24	竹田地区無文銭取上げ作業（保存処理）
10/24	重文旧熊谷家住宅保存活用検討委員会
10/24	熊谷家第2回家財調査指導会
10/29	熊谷家第3回家財搬出作業
10/29	ボランティア養成「第4回石見銀山講座」
10/31	豊栄神社文書調査

重文旧熊谷家住宅にて一般公開。

11/1	「石見銀山遺跡ニュース」第2号発行
11/2	発掘調査指導会（竹田・於紅ケ谷・出土谷）
11/7	今田正光氏聞き取り調査（大代町公民館）
11/7・8	第14回石見銀山遺跡発掘調査委員会
11/8	文献調査部会
11/8・9	科学調査部会
11/9	県議会総務委員会石見銀山遺跡視察
11/12	竹田地区炉跡取上げ作業（保存処理）
11/18	発掘調査現地説明会・重文旧熊谷家住宅公開
11/19~29・12/3	石造物調査（豊栄神社ほか）
11/26～30	MRS科学調査共同発表（ボストン）
11/24	編年史料綱目欧文史料編集会議（京都）
11/29～	宮の前地区発掘調査再開

銀の道ウォーク、龍源寺間歩付近にて。

12/4～5	大森・阿部家住宅発掘調査
12/8	今田正光氏聞き取り調査（銀山資料館）
12/9	上野利治家近代文書調査（銀山資料館）
12/9	石見銀山体験シンポジウム（大森町）
12/12	於紅ケ谷地区第2回三次元計測
12/17～20	熊谷家文書調査（大田市立図書館）
12/25	発掘科学両調査打合会（銀山事務所）
1/31	熊谷家第4回家財搬出作業
1/28	龍昌寺聞き取り調査（久利町）
2/5～7	阿部家住宅発掘調査
2/4～6	科学調査報告書編集会議
2/4～28	仁摩町柑子谷地区遺跡分布調査
2/21	県知事大久保間歩視察
2/16	熊谷家文書調査（大森町）
3/12～14	石造物関連調査（赤来町）
3/13	於紅ケ谷地区第3回三次元計測
3/17	解題銀山旧記関連調査（岡山県博ほか）
3/20～25	県指定史跡阿部家住宅発掘調査
3/20～22	熊谷家文書調査（大田市立図書館）
3/26	文化庁伊藤調査官街道調査指導
3/27	史跡石見銀山遺跡保存計画策定委員会

県知事の大久保間歩視察。安原谷、本谷交点付近にて。

資料紹介 4

上野家（下博多屋）近代史料について

岩屋さおり

故上野利治氏が所蔵されていた史料であり、現在は大田市立図書館に寄託されている。近世史料と近代史料とをあわせて「上野家（下博多屋）文書」と呼んでいる。下博多屋は、この上野家の屋号である。

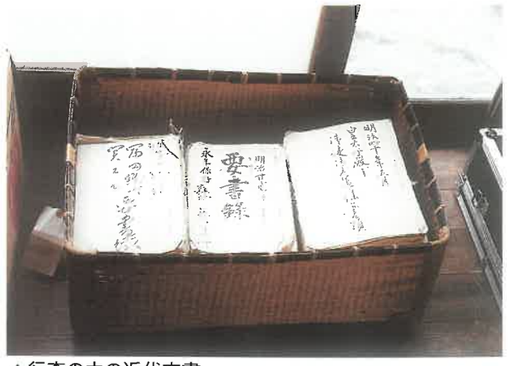
上野家は、近世から近代にかけて石見銀山の鉱山経営にたずさわった歴史をもつ。そのため、近世・近代の鉱山経営関係史料が中心となっている。

近代史料については、すべて藤田組が経営していた時期のものである。大森鉱山として創業した1886（明治19）年から、1923（大正12）年の休山を経て、1937年（昭和12）年に至るまでである。近代の部分には絵図面も多く、貴重な資料となっている。現在確認されているのは、図面が220点余、鉱山経営関係書類綴りが70点余である。図面については、鉱山に関係する地籍図、絵図面、坑道図面が含まれる。書類綴りについては、鉱業権や土地の権利に関するもの、鉱業所の収益に関するもの、鉱石の品位に関するものなどが含まれている。史料の保存状態はおおむね良好である。

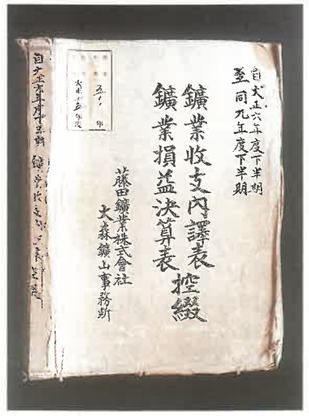
近代史料の行方については、不明の部分が多い。1923（大正12）年、大森鉱山が休山したときに経営関係書類は、柵原鉱山事務所に移管されたという。ここで火災にあい消失したものも多かったようである。『七十年之回顧』（同和鉱業株式会社発行、1955年）や『創業百年史』（同社発行、1985年）のために、同和鉱業株式会社の社史編纂委員会事務局が管理していたものもある。

一般的にみると近代史料としては、決して多いと言える量ではないが、これらを考慮にいれるとするならば、上野家（下博多屋）に存在する史料は、大森鉱山に関する現存する史料の大半を占める貴重なものであると言える。

上野家に藤田組時代の鉱山経営関係史料が存在する理由は、上野虎次郎氏が1899（明治32）年から1922（大正11）年まで、大森鉱山事務所の所長を務めていたので、経営関係書類の所在を把握し、手に入れることが可能だったということが、まずあげられる。それに加えて、虎次郎氏は鉱山経営によって地域を復興させたいとの思いが強く、そのため書類を保管することに熱心であっただろうということも、現在まで大切に所蔵されてきた要因であると推測している。



▲行李の中の近代文書



▲大正年間の大森鉱山事務所の書類綴

虎次郎氏は、高橋家から上野家（下博多屋）に養子として迎えられた人物である。上野家と高橋家の結びつきは強く、徳川時代から鉱山を共同で経営していた頃からのものであり、上野家に後継者がいない場合には、高橋家から養子をとることになっていた。虎次郎という人物は、温厚・厳格な人物であり、鉱山に関係することだけでなく、様々なことについて人々から相談を受けていた。そのように人望の厚い人だったという。（2000年8月故上野利治氏からの聞き取りより）

石見銀山歴史文献調査団で鉱山関係の文書調査を始めてから最初の数年は、近代史料は皆無であると考えていた。しかし、近世史料の調査を進めるなかで、利治氏が近代史料を所蔵しておられることがわかった。調査が進行した段階で、氏のご厚意により、蔵の中からさらに40点ほどの近代文書を出していただき、新出史料を調査するという幸運に恵まれた。最後に、おしみなく史料を提供し、調査に協力してくださった故上野利治氏に感謝を申しあげて、締めくくりたいと思う。

（石見銀山歴史文献調査団　大阪大学大学院）

資料紹介 5

旧大森村覚法寺の梵鐘

鳥谷芳雄

1　はじめに

いまから30年ほど前、日本の梵鐘研究の第一人者であった坪井良平氏は、慶長末年以前の梵鐘銘を集成し「日本古鐘銘集成」を著したが、その中に石見銀山に関係した銘文を紹介している。[1] それは今日大阪府寝屋川市の正法寺に伝来する梵鐘で、もとは石州大森村に所在した覚法寺のものであった。しかし、この資料は当地ではあまり知られず、これまで取り上げられることがなかったに等しい。[2]

2　梵鐘の概要と銘文

本鐘は、総高110cm、口径65cmを測る和鐘である。竜頭と撞座が同一方向にあるタイプで、乳の間に4段4列の乳が付き、池の間を上下二段に分けて中の間を設け、草の間には簡素な唐草文を施す。外面はもとより一部内面にまで銘文が刻まれ字数が多い。少なくとも4時期にわたって記されており、慶長20年（1615）の元銘をはじめ、明暦２年（1656）、昭和３年（1928）、昭和14年（1939）の３次にわたる追銘が刻まれる。ここで重要なのは当地に関係した中帯の次の元銘である。

▶大阪府正法寺に懸かる旧大森村覚法寺の梵鐘

（第1区）南閻浮提日本国」山陰道石州迩摩」郡佐摩郷大森村」覚法寺

（第3区）干時慶長廿年乙卯」卯月廿三日」願主順教」大工邑智郡河本住」山根九郎左衛門

これによると、本鐘は慶長20年（1615）石見国迩摩郡佐摩郷大森村の覚法寺鐘として製作された。願主は順教であり、作者は邑智郡河本住の大工山根九郎左衛門である。

覚法寺は邑智郡邑智町大字吾郷に現存する浄土真宗寺院である。当初は真言宗、16世紀の後半に浄土真宗に改宗したとされるが、創建年代やいつ大森から移動したのか、記録を失っているためはっきりとしない。口伝では吾郷に移っただけでも転々としたという。

3　鋳物師山根氏と石見銀山

作者の山根氏は、戦国期には当地域の支配権力であった小笠原氏と結びつき、全国的な鋳物師支配の再興を目指した真継家と関係しながら石見国の鋳物師頭領として国内の鋳物師集団の統括をしていたことで知られている。[3]

山根氏と石見銀山との関係は天文21年（1552）のころ、山根氏が真継家の使者に宛てた文書の中に「銀山大工所へ両度申渡候へ共」といった文言がみえ、[4] 鋳物師公役の徴収に関し鋳物師頭領の立場から銀山の大工（この地域の職人の頭領）へ申し渡している様子がうかがえる。

山根氏の製作と分かる鋳物作品は意外に少ない。今のところ専光寺の寛政3年（1791）銘や、浄福寺の寛政8年（1796）銘の梵鐘が知られているが、[5] 17世紀代に遡るものはこの他になく、本鐘は貴重な遺例である。

4　おわりに ―梵鐘の移動と銀山の盛衰―

本鐘は大森村覚法寺のために鋳造されたものであった。ところが、第1次追銘をみると早くも明暦2年（1656）には安芸広島の永照寺の什物となっている。つまり、覚法寺に懸かっていたのはわずか40年あまり。梵鐘がもとあった寺社を離れることはさほど珍しくないが、このように短期間で他所に移動したのにはそれなりの理由があったのだろう。

本鐘の流転の事情を考えたとき、最初のそれは銀山開発の盛衰や寺院の消長と関連がありはしないだろうか。石見銀山の産銀量は慶長年間にピークに達しながらも、寛永年間を過ぎると著しく減少したと

される。また、寺院についても最盛期には「銀山百ケ寺」といわれるほど相当数存在したが、銀山の衰微と共に移動・退転する寺院も少なくなかったようである。本鐘の製作と移動の時期がこうした銀山の盛衰のそれとおおよそ重なり合っていることに注目したい。

注
(1) 坪井良平「日本古鐘銘集成」補遺（角川書店、1972.3）
(2) 『石見銀山百か寺』（三瓶古文書を読む会）が『寝屋川市誌』を参考に唯一本鐘が現在正法寺にあることを記している。
(3) 藤間　亨「石見國鋳物師頭領山根氏資料調査報告書」（桜江町教育委員会、1992.3）。佐伯徳哉「戦国期石見小笠原権力と地域社会構造」『古代文化研究』（島根県古代文化センター、1993.3）
(4) 年未詳6月26日山根常安書状（真継文書『中世鋳物師史料』）
(5) 前掲『石見銀山百か寺』による。因みに専光寺は銀山栃畑谷から益田市へ、浄福寺は銀山本谷から水上町白坏へ移転したとされる寺院である。

新たに街道調査の着手など！ 平成14年度石見銀山遺跡関連事業の概要（県事業関連）

一昨年11月の世界遺産暫定リスト登載決定、そして今年3月の石見銀山遺跡の正式な国史跡指定拡大を受けて、世界遺産にふさわしい調査・整備を行うなど、世界遺産を目指した事業展開を図ります。

1. 総合調査事業

石見銀山遺跡の全貌をさらに明らかにするために、引き続き次の調査を行います。

①遺跡発掘調査、②古文書文献調査、③石造物調査、④科学調査、⑤間歩調査、⑥街道調査（新規事業）

2. 整備関係事業

整備基本計画に基づき、重要文化財旧熊谷家住宅の保存修理事業（H13～17）を行います。また、世界遺産として求められている遺跡の世界的重要性を情報発信する機能として、拠点施設整備について検討を行い、引きつづきサイン整備などを実施します。

3. 情報発信事業

石見銀山遺跡シンポジウムの開催、遺跡探索ツアーを実施し、「石見銀山展」の開催を検討します。

文献出版情報

～平成13年度発行の刊行物（島根県教委・大田市教委ほか）～

『世界遺産候補、石見銀山遺跡シンポジウム報告書』
『石見銀山関係編年史料綱目』
『石見銀山関係歴史年表（改訂版）』
『石見銀山関係論集』
『石見銀山遺跡発掘調査概要12－於紅ケ谷・竹田地区－』
『石見銀山遺跡石造物調査報告書２－龍昌寺跡－』
『石見銀山遺跡科学調査報告書－平成10～12年度－』
『石見銀山遺跡調査ノート1』
『石見銀山遺跡総合調査概報（2）』

～個別論文・その他の出版物～

・中田健一・遠藤浩巳「島根県石見銀山」『月刊考古学ジャーナル』No487（2002.5）
・仲野義文「江戸幕府の貨幣政策と鉱山経営の動向について～灰吹銀引替制を問題として～」『島根史学会会報』第38号（2001.10）
・松岡美幸「石見銀山附地役人・阿部光格の日記　その２」『古代文化研究第十号』（島根県古代文化センター、2002.3）
・目次謙一「石見銀山遺跡の出土銭貨について」『出土銭貨』第15号（出土銭貨研究会、2001.5）
・「特集　石見銀山遺跡総合調査5編」『季刊文化財』99号（島根県文化財愛護協会、2002.2）同101号1編（同協会、2002.3）
・「大森鉱山坑道」ほか『島根県近代化遺産調査報告書』（島根県教育委員会、2002.3）

仙ノ山に咲くシャガ

ミドリの季節，銀山の谷あいに，大森の町中に，澄んだ水が流れます。「石見銀山ニュース」第3号をお届けします。

石見銀山遺跡ニュース第3号　2002年5月10日発行　編集発行／島根県・大田市・温泉津町・仁摩町教育委員会　TEL0852-22-5649（代表）